

融合領域研究合同講義 学際研究特別講義 I、II

9月11日現在

【(後期開講) 講義の受講に係ることは、下部の申し込みフォームまたは、QRコードに入力されたメールアドレスにお知らせします。】

No	講義日	講時	担当者	所属等	講義題目	講義概要
1	10月4日(水)	13:00~14:30	日笠 健一	学際高等研究教育院長	講義ガイダンス	「合同講義」開設の由来、「合同講義」の意義及び学際高等研究教育院の理念・使命について解説するとともに、講義の進行について、講義の受け方や感想文の提出など成績評価について解説します。
					自然界の普遍法則と単位系	自然科学の発展につれて自然現象の奥に潜む普遍性が次第に明らかになることにより、お互いに関係がなく独立とされていた量・単位の間には、実は繋がりがあることがわかってきた。最新(2019年)の国際単位系では、7つの基本単位のうち、6つはこのような普遍性を用いて他の単位から導かれることで定義されている。このような自然を支配する普遍的な法則とはどういうもので、科学の発展と共に単位がどのように進化してきたかについて述べる。
2	10月11日(水)	13:00~14:30	滝澤 博胤	理事・副学長(教育・学生支援)	ケミストリーの場を探る	“chemistry”は、「化合する」、「相性・調和によって引き出される効果」を意味する言葉である。化学反応は、2種類以上の物質間のケミストリーによって性質の異なる化合物を合成するプロセスであるが、その化学反応の「場」を探ることで、新たな機能をもった新物質を誕生させることができる。周期表を眺めながら元素の組み合わせを選び、所望の結合状態、原子配列を実現するためには、ケミストリーの「場」の選択が極めて重要である。本講義では、元素戦略に基づく機能材料設計や、カーボン・ニュートラルの実現に資する新たな化学プロセスの開拓など、化学反応の場に着目した材料プロセスを展望したい。
3	10月18日(水)	13:00~14:30	大野 英男	総長	スピントロニクス	カーボンニュートラルを実現するには、情報処理を省エネルギーにする必要があります。電子の電荷とスピンを使うスピントロニクスは、半導体集積回路を大幅に省エネルギーすることができる革新的技術です。私たちの社会をより省エネルギーにするキーテクノロジー、スピントロニクスにまつわる材料、物理、素子、省エネルギー半導体集積回路について俯瞰すると共に、世界のトレンドを決めるダイナミズムとそれがもたらす社会的インパクトについてエピソードを交えてお話しします。
4	10月25日(水)	13:00~14:30	井上 邦雄	ニュートリノ科学研究センター長	宇宙・素粒子の謎を解く鍵:ニュートリノ	物質を構成する素粒子の一種であるニュートリノは馴染みある電子などの素粒子と比べて桁違いに多く宇宙に存在します。太陽や地球などの天体からも大量に放出されていますが、天体のような大きな物質でも簡単にすり抜けてしまうため身近に感じることが難しい素粒子です。大型の観測装置の進歩によってニュートリノ観測が実現し、ニュートリノの性質の理解が進んだため、ニュートリノの透過性を利用した天体内部の研究が可能になりました。一方、ニュートリノだけが持ちうる特別な性質が、宇宙に反物質が無く物質だけで作られていることを解明すると思われています。この性質の究明にも、ニュートリノ観測装置の特有な環境が利用できます。ニュートリノを利用した天体内部の観測や、宇宙物質優勢の謎への挑戦を紹介いたします。
5	11月1日(水)	13:00~14:30	栗原 和枝	未来科学技術共同研究センター教授	相互作用をバネばかりで測る表面力測定	相互作用の解明は、構造の理解とともに物質・材料科学の重要な基礎ですが、複雑なため構造に比べて十分にわかっておらず、方法も限られています。バネばかりを用いた相互作用力の距離依存性を測定する方法が最も有力で、相互作用の特徴や起源を研究し、解明することができます。逆に、相互作用を測定して、材料、とくにその界面の特性を調べることも可能です。しかし、従来は測定が特定の試料に限定されており、多くの対象に適用するためには、装置開発や試料の調製法の開発が必要でした。現在では、金属や高分子、電極から氷まで幅広い対象を研究できるようになりました。方法の応用として、身近な力である摩擦を測定し潤滑材料の開発を支援したり、同じ測定法を様々な工業材料の特性評価に展開しています。また、このような研究をForceometryと呼ぶことを提案しています。測定法の基礎と、最近の展開も含め解説します。
6	11月8日(水)	13:00~14:30	小谷 元子	理事・副学長(研究)	科学の共通言語「数理学」	デジタル変革が社会構造を大きく変えようとしている。人類の歴史の中で、科学、科学技術は何度か大きくその定義と役割を飛躍させてきた。科学および科学技術の共通言語である数学・数理科学もその流れのなかで発展してきた。特に、デジタル変革のなかで数学・数理科学への期待が世界で高まっている。世界動向を踏まえ、総合的に資する諸分野・産業連携の実例を紹介したい。
7	11月15日(水)	13:00~14:30	今村 文彦	災害科学国際研究所教授	災害科学国際研究所の発足と現在の活動 — 今後のリスクとレジリエント社会構築に向けて	東日本大震災の1年後に東北大学に災害科学国際研究所が発足し、当時の課題を解決するべく文理融合の英知を結集し、得た知見をベースに自然災害科学に関する世界最先端の研究を強力に推進する組織を立ち上げた。すでに、2015年国連防災世界会議での活躍、2017年第一回世界防災フォーラムの開催など、その活動は学術を越えて世界社会への貢献を目指している。この組織では、どのような学際連携の取組が生まれ、どのようにその成果を復興支援や今後の防災活動として貢献活動を展開しているのか紹介したい。高度化しシミュレーションで解析されつつある、その大規模地震や津波の実態を見て頂き、なぜあれだけの災害が生じたのか?その上で、我々は今後何をすべきなのか考えていただきたい。さらに、災害対応サイクル理論を適用することで4つの科学分野を融合させ、学内での学際連携を基盤とした「災害科学」の学際研究領域について紹介したい。現在は自然災害、地球規模気候変動に加えて大規模感染症などが深刻であり様々なリスクが生じている。これらに対して対応力と回復力のあるレジリエント社会構築の必要性が叫ばれている。
8	11月22日(水)	13:00~14:30	早瀬 敏幸	学際科学フロンティア研究所長	実世界の流れを再現する — コンピュータシミュレーションの新たな展開 —	流れは、呼吸や血流などの生命維持から、室内環境、輸送機器や大規模プラントなどの人工物、大気や海流などの地球環境にわたる幅広い分野の問題に関わっている。特に医療診断や流れの制御、気象予測など、実世界の流れを正確かつ詳細に知ることが必要な問題は多い。計測はそのための最も直接的な方法であるが、時間的・空間的に広がりをもつ流れの状態を完全に計測することは困難である。一方でコンピュータシミュレーションによれば流れ場の詳細な情報が得られるが、正確な初期値や境界条件は一般に未知であり、実世界の流れを正確に再現することは難しい。このように計測やシミュレーション単独では解決が困難な問題を、両手法の融合により解決しようとする研究が近年様々な分野で活発に行われている。本講義では、計測と融合した新たなシミュレーション手法について説明し、種々の流れ解析への適用例について述べる。
9	11月29日(水)	13:00~14:30	大隅 典子	医学系研究科教授 副学長(広報・ダイバーシティ担当) 附属図書館長	「ジェンダーリサーチ」のススメ	19世紀初頭に活躍した解剖学者ジョン・パークレーは、男性の骨格図の隣に、当時、人間に次ぐ知性の持ち主とされていた「ウマ」の骨格図を示し、女性の骨格図の脇には「ダチョウ」の骨格図を配した。なぜ、鹿馬かという、小さな頭、細い首もさることながら、大きな骨盤、加えて多産であることが「女らしさ」の理想を表すと考えられたか?近代科学の世界には、性差を強調するジェンダー問題があったのだ。その後、20世紀前半までのフェミニズムでは、法的男女平等を掲げ、「男女には違いは無い」という視座から論じられ、脳の性差についての研究など、もってのほか!とタブー視されていた。一方、医学領域では、「ヒト=男性」とされ、女性特有の臓器や組織に関係する「女性医療」は特別なものとして扱われてきた。基礎研究においても、実験動物の性差については十分な注意が払われず、雄のデータが用いられることが圧倒的に多かった。しかしながら、疾患の発症率や病態の性差や、薬物の作用性に性差が認められることをきっかけとして、時代は今、生物学的な性差を科学的に捉える流れに舵が切られるようになってきた。講義ではこのような「性差に配慮した研究 gendered research」について紹介したい。 【参考サイト】 大隅研HP: http://www.dev-neurobio.med.tohoku.ac.jp/
10	12月6日(水)	13:00~14:30	阿尻 雅文	材料科学高等研究所教授	Mixing the Unmixable	異なる発想・文化の融合こそが新たなものを生み出すのだと思う。講演者が開発してきた超臨界流体反応技術や現在すすめているナノ材料プロセス・サイエンスプロジェクトを例に挙げつつ、その重要性について考えてみたい。「融合」の重要性は、自然科学や技術の中だけの問題ではなく、学術と社会についても同様である。従来、科学技術はEfficiencyの最大化を目指してきたが、社会・市民の幸福・満足、Sufficiencyを最大化するための科学技術の在り方を考えていく必要があるように感じている。そこには、人文社会科学と自然科学との融合はもちろん、社会・市民と学術が融合し未来づくりをしていく新たな方向性があるように思う。
11	12月13日(水)	13:00~14:30	寺田 真浩	理学研究科教授	欲しいものだけを作る化学:有機合成化学と理論科学の融合	有機化学反応によって欲しいものだけを選択的に合成することは環境負荷軽減の観点からも強く望まれています。実際はそれほど簡単なことではありません。この講義では選択的に有機化合物を得る手法の中でも最も高度な方法論である、鏡像異性体の作り分けを触媒によって行う触媒的不斉合成法を紹介します。優れた触媒的不斉合成法を確立するために、従来は多くの実験を経て望む鏡像異性体を得る方法を試行錯誤の上で見つけ出すのが主流でした。こうした科学者の直観に基づいて開発する方法論から脱却することを旨とし、理論科学計算の手法を積極的に用いることで、論理的に触媒分子や反応系の設計指針を導き出すことができないか検討を進めています。この講義では、実験化学と理論科学計算の融合を目指して進めている最先端研究を紹介いたします。
12	12月20日(水)	13:00~14:30	押谷 仁	医学系研究科教授	COVID-19とScience	COVID-19に対しては世界各国で莫大な研究費が投じられ、急速に科学的知見が蓄積されている。治療薬やワクチン開発に關しては新たな科学的知見が生かされ非常に速いスピードで実用化されてきている。特にmRNAワクチンの開発・実用化はCOVID-19対策上大きなステップであった。しかし、治療薬やワクチンについてもさまざまな課題があり、完全な問題解決には至っていない。また科学的知見に基づかない政策決定も世界各国で行われてきている。国内ではこのようなパンデミックに対して十分な研究体制が確立し、いままにパンデミックを迎えたことで多くの課題が明らかになった。特に臨床研究や疫学研究の体制が十分に整備されてこなかったことが科学的貢献という点では多くの国に後れを取る原因となっている。さらに、COVID-19の問題はもともとウイルス学や疫学といった領域の研究だけでは解決しない問題になっている。COVID-19の問題を考えるためには、人文・社会科学との共同研究を含めた真の学際的な研究が必要である。この講義では、COVID-19のパンデミックを通して見えてきた科学の課題について考えていきたい。
13	1月10日(水)	13:00~14:30	山本 雅之	東北大学 東北メディカル・メガバンク機構長	酵素医学とバイオバンク	酵素は蠟燭の火を燃やすと共に、私たちの体を生きながらえさせる重要な環境因子である。酵素は、私たちの体が効率的にエネルギーを獲得することを保証するが、一方、過剰な酵素は私たちの体を錆びせていく。近年に至り、ようやく、酵素濃度の変化に反応して、体を守る仕組みの分子基盤が解明しつつある。本講義では、酸化ストレスから体を守るKEAP1-NRF2制御系の概要と、同制御系が宇宙環境ストレスにも応答する様子を紹介する。また、東北メディカル・メガバンク機構の活動を紹介します。学生諸君に「酵素医学」「宇宙環境利用」「バイオバンク」の興味深い世界を実感して頂くと共に、さらなる学習のガイドを提供したい。
14	1月17日(水)	13:00~14:30	中沢 正隆	災害科学国際研究所特任教授	光ファイバ通信の現状と将来展望	光ファイバは髪の毛のように細いガラスから出来ているが、その中心にあるコアに光を閉じこめて、大量の情報を高速に長距離伝送している。伝送速度は1秒間に100テラビット、伝送距離は17万kmに達し、グローバルネットワークを実現している。この講義では光通信システムを構成する光源・変調器・ファイバ・受光器などの各種光デバイス技術を簡単に説明し、今日の多様な光伝送技術について紹介する。さらに、我々が世界に先駆けて挑戦している革新的な光伝送技術および無線通信との融合を目指したBeyond 5G技術について講義する。
15	1月24日(水)	13:00~14:30	小泉 政利	文学研究科教授	言語の語順と思考の順序:言語が違えば世界が違って見えるか?	ベンジャミン・リッーウォーフとエドワード・サビアが、「異なる言語の話者は世界の捉え方が異なる」とする「言語相対性仮説」を提唱して以来、言語と思考の関係は多くの人の興味を惹きつけてきた。言語が思考を決定するのか?あるいは逆に思考が言語に影響を与えるのか?この授業では、この古くて新しいテーマである言語と思考との関係を、言語の語順という観点から検証する。具体的には、SO語順(主語(S)が目的語(O)に先行する語順)が、その逆のOS語順に比べて、処理負荷が低く母語話者に好まれる傾向があることが多くの研究で報告されている。しかし、従来は研究は全てSO語順(SO語順を文法的基本語順と見做す)を対象にしているため、この傾向が個別言語の基本語順を反映したものなのか、あるいは人間のより普遍的な認知特性を反映したものなのか分からない。そこで、この授業では、SO語順とOS語順を比較対照することによって、人間言語における語順嗜好を決定する要因ならびに、「言語の語順」と「思考の順序」との関係を探る。

【備考:毎週水曜3講時】

【留意事項】

- 以下の申し込みフォームまたは、QRコードから9月30日(土)までにお申し込みください。
<https://forms.gle/tSTQkMAjnDoGtWwB9>
- 講義は、Zoomで行います。
- 受講に係ることは、申し込みの際に入力されたメールアドレスにお知らせします。
- (修士)融合領域研究合同講義は学際高等研究教育院指定科目です。
- 大学院共通科目の(修士)融合領域研究合同講義、(博士)学際研究特別講義 I (No.1-8)、II (No.9-15)の講義概要です。大学院共通科目については、<https://pgd.tohoku.ac.jp/rpc/subjects.html>をご確認ください。

